

## 第 34 回（生活支援）分科会報告書

1. 開催日時：平成 28 年 7 月 6 日（木）18：30～20：00

2. 開催場所：社会福祉会館 3 階

3. 参加者（所属のみ）

八女市社協、八女市地域包括、ゆうゆう、夢工房、陽だまりの里、八女作業所、蓮の実園、年輪の園、サングリーン、蓮の実団地、ミライプラス、若楠園、広川町、八女市、リーベル

4. 実施内容

○講演 「熊本地震、被災地支援での障害者支援に感じたこと」

講師：自立支援センター久留米、地域活動支援センターフロンティア

代表 古川 克介氏 他、実際に支援に入られたスタッフ 2 名からも話を伺う。

○平成 28 年 4 月 14 日 21 時 26 分、地震発生。  
熊本県益城町で震度 7。

久留米震度 4、関係者へ一斉メール。翌日の朝 2 時までに安否確認が取れ、全員無事を確認。

○4 月 20 日に熊本学園大学に訪問。

地震直後に、地域住民や学生が集まり、大学が教室を解放することを決めた。全盲、車椅子の教授がいることや障害者との関わり

が多い学校であり、判断が早かった。車椅子のヒューマンネットワーク熊本代表から、障害者を対象にした避難所の依頼があり、講堂を解放。700 名の内、障害者は 30 名。最後 1 名の行き先が決まる（5 月 28 日）まで存続した。

飲酒、外出自由、出来るだけ管理しない取り組み。画期的で、活気があった。行政が作るマニュアルは役に立たない。ルールが守れない自閉症やその傾向がある人は避難所から排除される。避難所での合理的配慮が必要。避難計画の作成に当事者も参画することで、行政批判だけでなく互いに寛容な姿勢で協議が出来る。

フロンティアからは、3 日間×3 回の職員派遣。学ぶべき点は多かった。

いびきをかきヘルパーは、聾者の部屋。不安で電気付ける人は、聾啞者の部屋などの配慮が必要。

その場はあくまでも避難所。ずっといる場所ではないため、スタッフから密にならないで欲しいとの指示あり。

避難所に、障害者スペースの想定。1ヶ所に集めてしまうより 1ヶ所に数名の方が対応しやすい。

（参加者より）



仮設住宅での個人の要望を通して欲しい。それまで出来ていた事が出来なくなる。本人に合った段差など。出来ることを増やす方が、福祉サービスの量も減る。(脊損の女性が、危なくても壊れた家に住むのは住みやすい為)

○八女市社協が平成24年の水害時の対応について報告。

当日に話し合い、翌日に高齢者の安否確認。2日後にボランティアセンター立ち上げ。

ボランティアの受け付けやニーズ調査のマッチングが難しかった。そして何かしてあげようと言う自己満足の人もいた。

